

勉誠社

B e n s e i s h a

刊行書籍一覽

2025

●
国文学

●
日本語学・文字論

●
日本史

●
東洋文化・東洋史

●
仏教関連

●
美術・芸術

●
建築史

●
民俗学

●
書誌学・本の本・図書館情報学
アーカイブズ学・総記

ご注文方法

● | 勉誠社 WEB でご注文

弊社ホームページ (<https://bensei.jp>) にアクセスのうえ、
手順に沿ってご注文ください。迅速・確実です！



● | 勉誠社に直接ご注文

メール・ファックス・お電話などで弊社営業部宛に直接ご連絡ください。
以降のお手続きをご案内いたします。

〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町 2-18-4
電話 = 03-5215-9021
FAX = 03-5215-9025
E-mail = info@bensei.jp

● | 書店様ご注文

ご懇意の書店にご用命ください。全国の書店でご注文・お取り寄せいただけます。
Amazon ほか、各種 EC サイトでもご購入いただけます。

日本人の読書 新装版

古代・中世の学問を探る

佐藤道生 [著]

古代・中世の日本において、書物を読み、解釈し、伝えていくことは、限られた人びとにのみ許される特権的な営みであった。特に中国大陸ないしは朝鮮半島経由で伝えられた漢籍（漢語で書かれた書物）は、国家を支える政治や法、さらには思想や文化体系を伝える最先端のものとして重要視された。中国の文化全般を学ぶことを目的としたこれらの学問—漢学—は、国家の制度のなかにも位置付けられ、それを担う家では、書写・刊行された諸種の漢籍を入手し、独自の学問を形成していった。書物に残された注釈の書き入れ、来歴を伝える識語、古記録や説話に残された漢学者の逸話など、漢籍の読書の高まりをいまに伝える諸資料から古代・中世における日本人の読書の歴史を明らかにする。

貴重資料の図版収録点数総50超!

※本書は『日本人の読書』(2023年9月刊行)の新装版です。

A5判並製・520頁・2025年1月刊行
978-4-585-39047-3・定価11000円(税込)

古筆見の仕事

真偽の先にあるもの

編集部 [編]

この筆跡は誰のものなのか。ホンモノなのかニセモノなのか。由緒正しきモノなのか。モノにまつわる世界で常に問われ続ける永遠のテーマである。この「鑑定」という文化を、江戸時代の始まりより明治、大正、昭和に至るまで支えてきた人々がいた——古筆見である。その痕跡は、「極付き」「折紙付き」という言葉や、博物館などでよく目にする「伝 ○○」という表現に残されており、今なお我々のモノの見方にも大きな影響を与え続けている。「古筆見」とその中心であった「古筆家(こひつけ)」はいかに成立・展開していったのか。鑑定書や鑑定印にはどのような種類があるのか。彼らの鑑定を現代の我々はどうに考えるべきなのか。古筆家伝来の内部資料、菩提寺に残された資料や文物、さらには長期にわたる研究・蒐集の成果により、これまで纏まった記述のなされることのなかった古筆見・古筆家の営為や文化史的意義を多角的に明らかにする。

書物学26・B5判並製・120頁・2025年2月刊行
978-4-585-30726-6・定価2200円(税込)

勉誠社
新刊案内
国文学

貸本問屋と貸本文化

娯楽的書籍の出版・流通・受容

松永増成 [著]

江戸時代以降、日本国内における書籍の出版点数は年々増加し、それまで読書と縁のなかった層へも、次第に書籍が行き渡るようになっていった。しかし、当時の書籍はそれほど安価でなく、蔵書として代々引き継がれていくだけの価値を有する学問的な書籍以外、たとえば娯楽的な読み物などを購入して読む人々はそう多くなかった。そのような娯楽的書籍の流通・受容を支えたのが貸本文化である。近世・近代に営業していた貸本屋の実態、また、貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す機能を有した貸本問屋の業態を、諸種の史料を用いて解明。「貸本問屋→貸本屋→読者」という娯楽的書籍の出版・流通・受容の全容を明らかにする意欲作。

A5判上製・672頁・2025年2月刊行
978-4-585-32063-0・定価11000円(税込)

江戸庶民の読書と学び

増補改訂版

長友千代治 [著]

教養熱は江戸時代にもあった! 出版文化が花開いた江戸時代、さまざまな知識が書物によって伝播していく中で、人びとのなかに「学び」への熱が高まっていった。彼ら・彼女らはどのような知識を求め、どのような体系のなかで知を自家薬籠中のものとしていったのか。そして、それを担う書物はどのように読者の手に伝えられたのか。当時のベストセラーである啓蒙書や教養書、そして、版元・貸本屋の記録など、人びとの読書と学びの痕跡を残す諸資料の博捜により、日本近世における教養形成・書物流通の実情を描き出す。

※2017年に刊行され好評を博した同書の増補改訂版。

A5判並製・352頁・2025年2月刊行
978-4-585-32065-4・定価5280円(税込)

和漢韻文文学の諸相

村上哲見[著] / 浅見洋二・松尾肇子[編]

唐宋期を中心とする中国文学およびその影響下で生み出された日本漢文学について、多くの注目すべき研究成果を発表してきた村上哲見。これまで単行本未収録であった二十二編の論考を、「中国詞論」「中国文人論」「日本漢詩論」に分類して収載。幅広い知見と深い読解と考察により研究を領導してきた泰斗による珠玉の論文集。

A5判上製・384頁・2025年2月刊行
978-4-585-39049-7・定価13200円(税込)

水門

第32号

水門の会[編]

歴史学・文学・言語学・民俗学など諸学の粋を集め、ジャンルを越えた新たな学問世界への扉を開く。小特集は、「大和高田の白拍子舞—白拍子・静御前と龍神の道、太陽の道」・「宮澤賢治の周縁」の2本立てとなる。

水門32・A5判並製・378頁・2025年3月刊行
978-4-585-32463-8・定価3850円(税込)

勉誠社
新刊案内
国文学

描かれた法華経

本法寺蔵「法華経曼荼羅図」の時空

原口志津子[編]

富山本法寺に伝わる重要文化財「法華経曼荼羅図」は二十二幅一具という規模を有する。その内容は法華経の経文や注釈書に基づく場面ばかりではなく、説経や説話に基づく図像も含み、十四世紀の心性や文化を今に伝える貴重資料である。豊富な画像情報には、建築や仏像・仏画を制作する場面や法要、舞楽のほか、牛耕、田植え、稲刈り、製油、製薬、鍼灸、風呂・湯屋、鍼脈ダウジング、井戸掘り、商売、物見遊山、草履作りなどの風俗描写が含まれており、「一遍聖絵」に匹敵する鎌倉時代末期の絵画資料として、近年諸分野からの注目を集めている。本書では、美術史研究のみならず、国文学や歴史学の視点より本法寺本を多角的に考究。その所蔵流転を明らかにし、鎌倉時代末期の律僧の活動として、本法寺本を位置づけ、さらには本法寺本に描かれた説話内容を通じて学僧の世界と在俗者の交流実態を明らかにする。

アジア遊学301・A5判並製・240頁・2025年3月刊行
978-4-585-32547-5・定価3300円(税込)

本歌取り表現論考

小山順子[著]

「古きをこひねがふにとりて、昔の歌の詞を改めずよみすゑたるを、即ち本歌とすと申すなり。」(『近代秀歌』)

古典たる古歌を自身の歌に摂取し、新たな和歌を創造する技法、本歌取り。藤原定家が『近代秀歌』『詠歌大概』において準則を定めたこの新古今時代を特徴づける和歌表現は、如何なる歴史的展開の中で萌芽し、展開、定着していったのか。作者の意図と読者の読解との連関を支える教養・知的基盤の共同性に着目。既存の作品から表現や発想を借り、自身のものとして再生する営為の展開を、平安中期のプレ本歌取りのあり方、一大歌壇を成した藤原良経の詠作における漢詩文摂取、新古今時代の新たな和歌表現のあり方を示した藤原俊成の物語摂取、そして、新古今歌人たちが模索した諸種の本歌取り表現のなかにたどり、本歌取り成立の歴史的意義を明らかにする。

A5判上製・560頁・2025年3月刊行
978-4-585-39050-3・定価12100円(税込)

〈絵語り〉の日本中世

井上泰[著]

絵巻・物語絵などの絵画は、単に画題を絵で「伝達」するメディアではない。そこには制作にかかわる主体の画題への「解釈—表現」行為過程が介在している。その表象行為をめぐって、日本中世にはどのような特質が見られるのか。中世に制作された『信貴山縁起』、極楽寺蔵『六道絵』、『源氏物語絵詞』などを中心に、鑑賞者の解釈を誘発する、その表象の編成と仕組みを分析する。また、教育の場では絵画をどのように扱うことができるのか。実際の教育現場に携わった著者ならではの視点から、定番教材である『竹取物語』や『徒然草』を題材に、古典学習の拡充に向けた絵画の有効的な活用を提案する。

A5判上製・352頁・2025年3月刊行
978-4-585-37013-0・定価9900円(税込)

近代製本の100年

明治・大正・昭和

編集部[編]

折る、重ねる、綴じる、表紙を付ける……。製本には様々な工程があり、それぞれの作業を得意とする工場によるリレーの中で書物としてのかたちが作り上げられていく。日々進歩する製本機械のオペレーティング昔と変わらない手作業でしかできない工程、そして各工程を担う工場をまとめ上げる人脈。製本という営為には確実に人が関わり、技術の刷新と継承が行われている。製本の現場、工程、技術、そこに携わる人々のあり様に迫り、書物文化の100年を製本という側面から考える。大正13年創立の「京都製本紙截同盟会」から始まって、今年100周年を迎える京都府製本工業組合の面々による座談会も収録。京都の製本を支えてきた現場の方たちの研鑽の歴史、製本の現在の生の声をお届けする。

書物学27・B5判並製・96頁・2025年4月刊行
978-4-585-30727-3・定価2200円(税込)

勉誠社
新刊案内
国文学

中国の名作をどう読むか

真の主題を見極める

下定雅弘[著]

中国の古典には、王羲之「蘭亭序」、杜甫「感時花濺淚、恨別鳥驚心」、沈既濟「枕中記」、李商隱「夕陽無限好、只是近黃昏」など名作・名句と言われながら、その主題や解釈に議論があるものが少なくない。それら未解決の名作を取り上げ、あくまで原文に即しつつ、一字一句の典拠や作品の背景を究明し、あまたの議論に終止符を打つ。好評を博した『中国古典をどう読むか——規範からの逸脱、規範への回帰』の姉妹版。

A5判並製・592頁・2025年5月刊行
978-4-585-39048-0・定価6600円(税込)

日本中世の宗教世界

阿部泰郎[監修]佐藤愛弓・牧野淳司[編]

現代の我々の想像を遙かに超えて、中世の日本は、宗教的なものに満ちた世界であった。それは、単に神仏への信仰という観念的なことでなく、何らか「聖なるもの」の存在や働きを、日常に身体感覚を通じて直接に受けとめたり、反対に人から何者かへ訴え、働きかけるダイナミックな「冥と顕」の相互の交信が、絶えず繰り返られていた世界だったのである——。各地に伝存する多種多様な寺院資料を紐解き、また、文学・絵画・建造物・芸能といった諸メディアとの連環をとらえ、中世日本における豊饒な宗教的世界観を立体的かつ通史的に描き出す必読の書。学界を領導する18名の研究者による最先端の研究状況をまとめて一冊で知ることの出来る中世日本の社会・思想・文化を考えるための充実のレファレンスツール!

A5判並製・584頁・2025年5月刊行
978-4-585-31021-1・定価9350円(税込)

図書館の日本史

増補改訂版

新藤透 [著]

図書館はどのように誕生したのか？ 歴史上の人物たちはどのように本を楽しみ、収集し、利用したのか？ 寄贈・貸出・閲覧はいつから行われていたのか？ 古代から現代まで、日本の図書館の歴史をやさしく読み解く！ 2019年に刊行し、好評を博した一冊を大幅に加筆。

※2019年刊行の『図書館の日本史』に大幅に加筆し、新規に37項を収録。古代から現代にいたる日本の図書館の歩みを通史的にまとめ、解説した一冊。

ライブラリーぶっくす・四六判並製・520頁・2025年6月刊行
978-4-585-30018-2・定価4180円(税込)

極上の仮名

王朝貴族の教養と美意識

五島美術館 [編]

日本独自の文字として漢字を簡略化して生み出された「仮名」。その書の表現は10世紀から11世紀にかけて洗練され、特に王朝貴族により作られた美しい写本やそこから切り出された古筆切は、いまなお我々の眼を楽しませてくれる。日本の書の歴史を体系的に研究するために飯島春敬(1906~96)により蒐集された書芸文化院「春敬記念書道文庫」そして五島美術館が収蔵する平安時代に書かれた仮名や料紙の美しさを追求した名品に加え、日本書跡の淵源である明・清時代の中国書跡や拓本の重要作品をフルカラーで紹介。日本の書や表装に関する歴史研究を領導する七名の研究者による論考・コラム、王朝貴族の追求した仮名や料紙の美しさを体系的に理解することの出来る図説も収載した決定版！

※本書は五島美術館特別展示「極上の仮名」(2025/6/24~8/3開催)の公式図録です

A4判並製・208頁・2025年6月刊行
978-4-585-37020-8・定価2750円(税込)・品切れ

勉誠社
新刊案内
国文学

近現代日本を生きる テキスト遺産

モノ×営為×世界

Edoardo Gerlini・河野貴美子 [編]

近年、文化的アイデンティティを問う議論が世界的に展開している。その議論において頻りに活用されるのは「遺産」という概念である。書記資料、文章、文字など、いわゆる「テキスト」という文化的生産物は、近代および現代においてどのように変容し、「遺産」となっていったのか。その働きと諸相はどのように把握することができるのか。さまざまに姿を変える「モノ」としてのテキストのありかた、また、それにまつわる継承・選択・改編・再生等の多様で複雑な「営為」、そして、「テキスト」を取り巻く「世界」への広がりという三つの視点を織り交ぜることで、過去から現在まで営々と積み重ねられてきた「テキスト」と人間との関係性を問い直し、人文学を起点とした新たな世界認識の可能性を示す画期的成果。

アジア遊学305・A5判並製・240頁・2025年7月刊行
978-4-585-32551-2・定価3300円(税込)

外から見た 江戸時代の書籍文化

写本・版本・在外書籍

ピーター・コーニツキー [著]

江戸時代、女性の読書はどのように位置づけられていたのか。近世初期に勃興した活字印刷は、なぜ、製版印刷に駆逐されたのか。日本各地にのこるおびただしい数の写本は日本文化史のなかにどのように位置づけられるのか。海外の図書館になぜ多量の日本書籍が所蔵されているのか、それはいつ持ってこられたのか。日本の外からの視点を取り入れることで、日本における書籍文化の歴史がより鮮明に見える。日本の書籍文化史を海外からの視点で読み解き、学界をリードしてきたケンブリッジ大学名誉教授ピーター・コーニツキーによる日本書籍文化史講義！

A5判並製・496頁・2025年7月刊行
978-4-585-32067-8・定価9900円(税込)

相国寺

寺宝が伝える歴史と信仰

相国寺承天閣美術館 [編]

京都五山第二位の禅刹、相国寺。足利義満開基によるこの禅寺は、歴代足利将軍ゆかりの寺院、また渡来僧を含む数々の禅僧が交流した五山文学の発信地として、中世日本において大きな存在感を持った。しかし、たびたびの伽藍焼失などの憂き目に遭い、衰退と再興を繰り返し、近世初期には後水尾院による手厚い庇護のもと、現在に伝わる姿を形成していった。禅僧たち、そして足利将軍家、天皇家により、守り、伝えられてきた寺宝は何を語るのか——斯界をリードする15人の執筆者により本山相国寺そしてその塔頭の営みを明らかにする。

※北海道立近代美術館にて開催の「金閣・銀閣 相国寺展 若冲・応挙・芦雪—禅文化の名宝と美」(7月19日より9月7日まで)とのタイアップ企画!

書物学28・B5判並製・104頁・2025年8月刊行
978-4-585-30728-0・定価2200円(税込)

蔦屋重三郎と 日本の出版文化

蔦屋手引草

編集部 [編]

書物が広く庶民にも行きわたり、出版物が百花繚乱となった江戸時代に目を向けると、そこには蔦屋重三郎、西村屋与八のような版元、そして、北尾政重や葛飾北斎ら浮世絵師など、さまざまなキャストが浮かび上がってくる。江戸時代、そして、明治の人びとは書物とどのように付き合ってきたのか、その営みはどのような資料や痕跡から辿ることができるのか——。書物との息吹を伝える資料に魅入られた書物研究の先達へのインタビューを収載。また、それぞれの視点・収蔵資料から出版文化・書物文化のあり方を鮮やかに照らし出す太田記念美術館・大東急記念文庫・印刷博物館・たばこと塩の博物館・国文学研究資料館の学芸員による最新の知見を示すことで、日本の書物文化の面白さと広がりを示す画期的な一冊!

書物学29・B5判並製・112頁・2025年9月刊行
978-4-585-30729-7・定価2200円(税込)

勉誠社
新刊案内
国文学

近松・西鶴・芭蕉と出板文化

長友千代治 [著]

文学史に元禄三大家として特筆される、近松門左衛門・井原西鶴・松尾芭蕉——
彼らの作品への執念とその達成を出版文化史のなかに探る。元禄文化繚乱の時代に劇作・小説・俳諧の分野で新しい世界を築き上げた三者の営みを比較・総合して検討。先行作品をどのように受容し、自分の作品世界をどのように新しく作り上げたのか。それぞれの到達点は何だったのか。それはどう異なり、どう共通するのか——。
新たな出板文化が発展した江戸時代初期から元禄期において、三人が出板という営みをどのように対応したかを究明し、近松・西鶴・芭蕉の近世文化史における意義を明らかにする意欲作。

A5判並製・328頁・2025年9月刊行
978-4-585-32072-2・定価8800円(税込)

新装版 近世蔵書文化論

地域〈知〉の形成と社会

工藤航平 [著]

近世日本における出版文化の隆盛、そして文書による行政・経済システムの発展は、都鄙・身分を問わず、それぞれの社会的環境のもとで〈知〉の形成・蓄積をうながした。村落においては、当地における先例、行政や生活に関わる文書、そして書籍からの抜き書きなどを実務的な目的に併せて集めた編纂物が広く作成され、地域固有の〈知〉の源泉としてさまざまな場に応じて活用された。地域で受け継がれるアーカイブズを「蔵書文化」という観点から読み解き、近世社会特有の〈知〉の構造を描き出す。

※本書は2017年刊行の『近世蔵書文化論』(978-4-585-22200-2)の新装版です。

A5判並製・480頁・2025年9月刊行
978-4-585-32075-3・定価8800円(税込)

鏡としての日本文学

交響する中日古典

張龍妹[編]

日本文学を紐解くと、そこには中国文学の影響が少なからず散見される。それらを比較することは、中国古典の変容のあり方を発見することにつながり、さらに日本文学・文化の特徴を改めて見出すことになる。お互いの国の文学を研究することで、それぞれが響きあい、自国の文学を学ぶことのみでは見いだせなかった新たな魅力、意義を知ることにつながる。日本文学を研究する中国人研究者たち、そして長年中国で日本文学研究・教育に携わった日本人研究者たちによる古典文学の交響。日本文学を「中国」という他者としての視座から再考し、「国文学」の本質を問い直す。

アジア遊学308・A5判並製・352頁・2025年10月刊行
978-4-585-32554-3・定価3520円(税込)

新装版 源氏物語の話声と表現世界

陣野英則[著]

『源氏物語』は、書かれた言葉によってこの世に存在している。その言葉は、物語中の随所で、複雑にしてゆたかな意味を生成しているが、同時にそれは、単なる書き言葉ではなく、作中人物の発言あるいは心中の言葉、さらに物語を口頭で伝える人、それを書き取る人、書かれた言葉を書き写す人、編纂する人……、等々のさまざまな声が重なりあっている言葉として、異彩を放っているようにおもわれる。それらのさまざまな声＝「話声」から、『源氏物語』の言葉の魅力と特質とを解き明かしてゆく。

※本書は2004年刊行の『源氏物語の話声と表現世界』の新装版です。

A5判並製・400頁・2025年10月刊行
978-4-585-39055-8・定価11000円(税込)

勉誠社
新刊案内
国文学

新装版 源氏物語論

女房・書かれた言葉・引用

陣野英則[著]

作中人物として物語に関与し、語り手・書き手・読み手としてその生成と享受に携わる女房たち。物語を織りなす言葉のネットワークとも多面的に関わりつづける女房たちのありように着目しつつ、物語の内と外との連環をもたらす『源氏物語』の方法を明らかにする。

※本書は2016年刊行の『源氏物語論』の新装版です。

A5判並製・528頁・2025年10月刊行
978-4-585-39056-5・定価7700円(税込)

外圧の日本古代文学史

遠藤耕太郎・濱田寛・吉見健夫[編]

日本文学史は、外国文化の圧力——外圧——という脅威と向き合う心の葛藤の歴史である。古代日本の人々は、文字(漢字)や仏教・中国思想の外圧、国家制度や白村江の戦いと壬申の乱といった政治的・軍事的な外圧、文学作品や唐物と呼ばれる輸入品の外圧など様々なかたちで現れた外圧としての中国文化に対して、どのように葛藤し、そこから何を創造していったのか。『万葉集』や『源氏物語』などをはじめとする和歌や散文作品、漢詩文を、奈良と平安の二つの時代に分けて取り上げ、国際環境や国際感覚の異なる時代背景のもと、中国文化と格闘し、換骨奪胎、あるいは克服、憧憬しながら、文学を創造した人々の心の様相を探る。

アジア遊学309・A5判並製・256頁・2025年10月刊行
978-4-585-32555-0・定価3300円(税込)

高山寺本 明恵上人夢記 訳注

奥田勲・平野多恵・前川健一
立木宏哉・小宮俊海・野呂靖【編】

中世日本の思想や文化に大きな影響を与えた明恵上人。その明恵が自らの見た夢を詳細に書き記した「夢記」は、明恵その人の思想や心性を示すのみならず、日本人と夢や精神世界との関係を解き明かすための重要な基礎資料である。明恵が開いた梅尾・高山寺に伝わる夢記の全篇に翻刻・訓読・現代語訳・語釈・考察を付した決定版。既刊の『増補改訂版 明恵上人夢記訳注』と併せ、「明恵上人夢記」の全体像を把握する画期的成果。

A5判上製・554頁・2025年10月刊行
978-4-585-31022-8・定価8800円(税込)

法華験記の形成と思想

岡田文弘【著】

叡山僧・首楞嚴院沙門鎮源よって編まれた平安期を代表する説話集『大日本国法華経験記』（『法華験記』）。文学、歴史、仏教研究の各分野において注目すべき内容を多く含む同書は、平安期の仏教信仰を窺い知るための史料、『今昔物語集』をはじめとする様々な説話集の関連文献として重視・珍重されてきた。『法華験記』はいかに形成され、その説話からいかなる思想が透けて見えるのか。成立の時代背景や環境、恵心僧都源信についての記述、畜生をはじめとする異類に対する功德を説いた一連の説話群など多角的に検討し、形成の様相とその思想の特性を明らかにする。

A5判上製・448頁・2025年10月刊行
978-4-585-31026-6・定価11000円(税込)

勉誠社
新刊案内
国文学

和歌が生まれるとき

近世歌人の方法

大山和哉【著】

徳川幕府が開かれて近世という時代が始まり、それに応じて諸種の社会的変化が生じる中で、和歌もまた既存のあり方から大きくその内実に変容を来した。堂上・地下を問わず、様々な人びとがそれぞれに多様な目的意識のもとに、多様な方法を用いながら、「歌道」という一つの世界に参画していく。彼ら／彼女らは、なぜ和歌という表現手段を選び、詠出したのか――

詠歌、歌学、和文、歌道伝授、古典研究などの営為を精緻に分析し、歌人それぞれの和歌活動における固有の動機を把握。和歌が開かれていった十七世紀という時代に和歌が持ち得た多様な意義を浮かび上がらせることで、人びとが文学といかなる関係を結んできたか／結びうるかを照らし出す意欲作。

A5判上製・544頁・2025年10月刊行
978-4-585-39057-2・定価12100円(税込)

訓点語と訓点資料

第一五五輯

訓点語学会[編輯]

1954年の刊行以来、訓点資料、訓点語(漢文訓読語)をはじめ、文体史、音韻史、辞書史などに関する論文、資料紹介、解説文、索引など、これまでに約500編を公表、広く利用されている学術雑誌。年2回刊行。

●収録

カラー口絵=京都国立博物館蔵『梵字形音義』▼論文=京都国立博物館蔵『梵字形音義』——解題と影印(宇都宮啓吾)▼高知県安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多經』の訓点と注記(佐々木勇)▼漢字音の認定と字音仮名遣いをめぐって(石山裕慈)▼副詞「一向」の史的変遷と変化のメカニズム(姚堯)▼呉語系中国資料の日本語音写にみられる陰声韻と入声韻の転換(王竣磊)

訓点語と訓点資料155・B5判並製・178頁・2025年10月刊行
978-4-585-38101-3・定価4950円(税込)

動的視点からの 日本漢字音史研究

石山裕慈[著]

日本漢字音とは、単なる経年変化の中で受動的に採用されたものではなく、何らかの使用意識の下で、当時いくつか存した選択肢の中から自覚的・無自覚的に選択された結果のものである。本書ではこの「動的」な一面に着目し、個々の資料に出現する漢字音を分析し、相互に比較・対照。当時、どのような音が選択され、背後にどのような論理・力学があったのかを探り、中世以降の日本漢字音、すなわち日本語の漢字の音読みの歴史的变化について考察する。

A5判上製・432頁・2025年10月刊行
978-4-585-38007-8・定価12100円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本語学
文字論

日本人は漢文をどう読んだか

直読から訓読へ

湯沢質幸[著]

日本において古代から現在に至るまで延々と読み継がれてきた漢文。その読み方には中国から渡来した中国音で読む〈直読〉、そして、平安時代に生まれ、漢文読解の方法としてその地位を確立した〈訓読〉の二種類が存在する。しかし、古代から現代までの間に〈直読〉は消え、日本語で読む〈訓読〉がもっぱら使われるようになった。なぜ、日本では〈訓読〉優位の状況が生じたのか——。漢文を取り巻く環境を一つ一つ分析することを通して、〈直読〉から〈訓読〉への変化を追い、日本人の漢字漢文受容の歴史を描き出す。

四六判並製・240頁・2024年4月刊行
978-4-585-38006-1・定価3520円(税込)

論究日本近代語

第3集

日本近代語研究会[編]

広義の日本近代語における歴史と構造を、文字・表記、文法、語彙、表現、対照研究等の日本語学的観点から詳細に考究した、日本文学、日本史学、日本語教育学、表現論などの分野にも資する論文集。

A5判上製・424頁・2024年4月刊行
978-4-585-38523-3・定価16500円(税込)

武蔵武士を巡る

東京・神奈川の史跡と伝説

北条氏研究会 [編]

武蔵国内を本拠として、平安時代末期から南北朝時代にかけて活躍した「武蔵武士」。彼らの出自は多様であり、その中には、坂東八平氏の一部や武蔵七党、古代の郡司の系統を引く氏族、また、鎌倉幕府成立の時に活躍した畠山重忠や熊谷直実なども含まれる。源平合戦で活躍し、鎌倉幕府の発展にも寄与した武蔵武士たちが、武蔵国南部に残した史跡やそこに伝わる伝説を紹介。地形、河川、道、行政区分、戦場、板碑・石造物などを多数の写真・図とともに詳しく解説する。文字史料だけではわからない、新たな時代の開拓者としての姿や、鎌倉に通じる道の景観など、武蔵武士の足跡をたどるための、最良のガイドブック! 地域ごとの史跡一覧・仏像一覧、実際に現地を巡るための散策コースなども付す。

大好評『武蔵武士を歩く——重忠・直実のふるさと 埼玉の史跡』(2015年)の待望の姉妹編!!

A5判並製・480頁・2025年3月刊行
978-4-585-32055-5・定価4180円(税込)

新装版武蔵武士を歩く

重忠・直実のふるさと 埼玉の史跡

北条氏研究会 [編]

鎌倉幕府成立の要として、中世史の中枢に足跡を残した「武蔵武士」。かれらが武蔵の各地に残した様々な史跡を膨大な写真・図版資料とともに詳細に解説。史跡や地名から歴史を読み取るためのコツや、史跡めぐりのルート作成方法を指南。武蔵武士の息づかいを体感するためのガイドブック。

※本書は『武蔵武士を歩く』(2015年1月刊行)の新装版です。

A5判並製・400頁・2025年3月刊行
978-4-585-32062-3・定価2970円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

水門

第32号

水門の会 [編]

歴史学・文学・言語学・民俗学など諸学の粋を集め、ジャンルを越えた新たな学問世界への扉を開く。

小特集は、「大和高田の白拍子舞—白拍子・静御前と龍神の道、太陽の道」・「宮澤賢治の周縁」の2本立てとなる。

水門32・A5判並製・378頁・2025年3月刊行
978-4-585-32463-8・定価3850円(税込)

描かれた法華経

本法寺蔵「法華経曼荼羅図」の時空

原口志津子 [編]

富山本法寺に伝わる重要文化財「法華経曼荼羅図」は二十二幅一具という規模を有する。その内容は法華経の経文や注釈書に基づく場面ばかりではなく、説経や説話に基づく図像も含み、十四世紀の心性や文化を今に伝える貴重資料である。豊富な画像情報には、建築や仏像・仏画を制作する場面や法要、舞楽のほか、牛耕、田植え、稲刈り、製油、製薬、鍼灸、風呂・湯屋、鍼脈ダウジング、井戸掘り、商売、物見遊山、草履作りなどの風俗描写が含まれており、「一遍聖絵」に匹敵する鎌倉時代末期の絵画資料として、近年諸分野からの注目を集めている。本書では、美術史研究のみならず、国文学や歴史学の視点より本法寺本を多角的に考究。その所蔵流転を明らかにし、鎌倉時代末期の律僧の活動として、本法寺本を位置づけ、さらには本法寺本に描かれた説話内容を通じて学僧の世界と在俗者の交流実態を明らかにする。

アジア游学301・A5判並製・240頁・2025年3月刊行
978-4-585-32547-5・定価3300円(税込)

古文書研究

第98号

日本古文書学会 [編]

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。

●収録

論文＝中世朝廷の官司下文(殷捷)▼観応の擾乱前後における山門派僧の去就(高鳥廉)▼江戸幕府大老奉書の発給(野田浩子)▼近世中後期における代官・預所大名の序列と支配替(尾崎真理)▼特別寄稿＝中世古文書学の再検討(上島有)▼追悼文＝元木泰雄理事追悼文(漆原徹)▼古文書めぐり＝尚古集成館の所蔵文書について(福元啓介)▼地域と古文書＝荒川区立荒川ふるさと文化館の古文書講座と二つの古文書サークル(亀川泰照)▼随筆＝天正二十年五月十八日山中長俊書状(藤井讓治)▼研究余滴ほか

A5判並製・160頁・2025年1月刊行
978-4-585-32408-9・定価4180円(税込)

地方史誌から世界を読む

小二田章 [編]

歴史を中心に地方のあり方を描き出す総合的書物、「地方史誌」。これまでの研究では記載内容が参照されるだけで、「地方史誌」それ自体の総合的検討はなされてこなかった。しかし、世界に目を向けてみれば、各地の文化・集団に寄り添う「地方史誌」は歴史叙述・歴史認識に結びつき、その比較検討は世界史的な課題と言える。本書では、世界各地の「地方史誌」における叙述の主体、また、対象となる場や事柄、さらには近代に至るまでの受容の諸相を考察し、「地方史誌」を比較検討するための礎を提示する。

A5判上製・352頁・2025年1月刊行
978-4-585-32064-7・定価8800円(税込)

勉誠社
新刊案内

日本史

孝謙天皇・称徳天皇御伝

米田達郎・米田雄介 [編著]

聖武天皇と光明皇后を両親とし、史上6人目の女性天皇であった孝謙天皇(重祚して称徳天皇)。その治世下は必ずしも安定していたとは言えず、宇佐八幡宮事件、道鏡との関係などで取りざたされることが多いが、その一方で仏教に対する信仰が篤かったこと、男性のみならず女性も登用する人事を行ったことなど、特筆すべき事績が数多く残されている。『続日本紀』に記載されている記事を中心に、『扶桑略記』『諸寺略記』『東大寺要録』『寧楽遺文』『万葉集』など諸種の資料も博搜し、原文と書き下し文を付して編年体にて収録。研究の基盤を提供する。

A5判並製・290頁・2025年1月刊行
978-4-585-32061-6・定価7150円(税込)

茶の湯の文化史

五味文彦 [著]

鎌倉時代に行われた闘茶、室町期の会所や草庵での茶の楽しみ、信長や秀吉が愛した茶道具、戦国期に千利休が大成した「わび茶」の継承…。中国から伝来した茶は、時代により、様々なかたちで人々に親しまれてきた。公家、武士、僧侶、そして庶民、それぞれの身分の人々はどのように茶を楽しんだのか。茶の作法はいかにして生まれたのか? 日本人の心に深く寄り添う茶の湯の歴史を、多数の図版とともに楽しく解説!

四六判並製・272頁・2025年3月刊行
978-4-585-32060-9・定価2640円(税込)

〈絵語り〉の日本中世

井上泰 [著]

絵巻・物語絵などの絵画は、単に画題を絵で「伝達」するメディアではない。そこには制作にかかわる主体の画題への「解釈—表現」行為過程が介在している。その表象行為をめぐって、日本中世にはどのような特質が見られるのか。中世に制作された『信貴山縁起』、極楽寺蔵『六道絵』、『源氏物語絵詞』などを中心に、鑑賞者の解釈を誘発する、その表象の編成と仕組みを分析する。また、教育の場では絵画をどのように扱うことができるのか。実際の教育現場に携わった著者ならではの視点から、定番教材である『竹取物語』や『徒然草』を題材に、古典学習の拡充に向けた絵画の有効的な活用を提案する。

A5判上製・352頁・2025年3月刊行
978-4-585-37013-0・定価9900円(税込)

日本中世の宗教世界

阿部泰郎 [監修] 佐藤愛弓・牧野淳司 [編]

現代の我々の想像を遙かに超えて、中世の日本は、宗教的なものに満ちた世界であった。それは、単に神仏への信仰という観念的なことでなく、何らかく「聖なるもの」の存在や働きを、日常に身体感覚を通じて直接に受けとめたり、反対に人から何者かへ訴え、働きかけるダイナミックな「冥と顕」の相互の交信が、絶えず繰り返り広げられていた世界だったのである——。各地に伝存する多種多様な寺院資料を紐解き、また、文学・絵画・建造物・芸能といった諸メディアとの連環をとらえ、中世日本における豊饒な宗教的世界観を立体的かつ通史的に描き出す必読の書。学界を領導する18名の研究者による最先端の研究状況をまとめて一冊で知ることの出来る中世日本の社会・思想・文化を考えるための充実のレファレンスツール!

A5判並製・584頁・2025年5月刊行
978-4-585-31021-1・定価9350円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

瓦から探る中世寺院

中世瓦研究会 [編]

考古学における瓦研究の歴史は古く、日本への仏教伝来にもなつて飛鳥時代に建立された寺院で使用された瓦の研究に始まり、奈良時代の諸国国分寺や官衙の造営に使われた瓦などについての豊富な研究が蓄積されている。いわゆる歴史考古学において、瓦研究は土器の研究とならんで主要な研究分野として発展してきた。源頼朝が鎌倉時代初期に政権を築いた鎌倉の地に建立した永福寺の瓦を中心に、その形式・文様などから、生産・流通までを検証。考古学、美術史、文献史学など関連諸学からアプローチを集結し、瓦から見える「モノ」と「ヒト」の関わりを解明する。

アジア遊学303・A5判並製・272頁・2025年5月刊行
978-4-585-32549-9・定価3300円(税込)

極上の仮名

王朝貴族の教養と美意識

五島美術館 [編]

日本独自の文字として漢字を簡略化して生み出された「仮名」。その書の表現は10世紀から11世紀にかけて洗練され、特に王朝貴族により作られた美しい写本やそこから切り出された古筆切は、いまなお我々の眼を楽しませてくれる。日本の書の歴史を体系的に研究するために飯島春敬(1906~96)により蒐集された書芸文化院「春敬記念書道文庫」そして五島美術館が収蔵する平安時代に書かれた仮名や料紙の美しさを追求した名品に加え、日本書跡の淵源である明・清時代の中国書跡や拓本の重要作品をフルカラーで紹介。日本の書や表装に関する歴史研究を領導する七名の研究者による論考・コラム、王朝貴族の追求した仮名や料紙の美しさを体系的に理解することの出来る図説も収載した決定版!

※本書は五島美術館特別展示「極上の仮名」(2025/6/24~8/3開催)の公式図録です

A4判並製・208頁・2025年6月刊行
978-4-585-37020-8・定価2750円(税込)・品切れ

社寺建築を 知るための用語集

日本の歴史的建築を考える

濱島正士 [著]

文化財建造物保存技術協会 [編集協力]

日本の社寺建築は1300年の歴史を持ち、各時代に建てられた様々な建造物が数多く残されている。

それらは建てられた時代や所在する地域の特徴を示しており、日本の歴史・文化を知るための重要な資料となっている。しかし、これらの木造建築に関わる用語は、単にその数が極めて多いだけでなく、時代や建造物の種類によって名称・解釈が異なることもあり、研究者ですらとまどう場面も少なくない。伝統的な木造建築の歴史研究および文化財建造物の保存修理を長年リードしてきた著者が、日本建築の歴史を考えるうえで重要な用語を豊富な図版資料と共に解説。

B5判並製・204頁・2025年6月刊行
978-4-585-35003-3・定価4180円(税込)

徳川美術館蔵 「遊楽図屏風(相応寺屏風)」 は語る

将軍家光の政治と「邸内遊楽図」の誕生

黒田日出男 [著]

宏壮・豪華な邸宅における遊楽・遊興が描かれ、遊びに興じている人物たちのさまざまな姿が表現される「邸内遊楽図」。なかでも徳川美術館蔵「遊楽図屏風(相応寺屏風)」(重要文化財)は最優品として知られる近世風俗画の逸品である。その左隻の豪壮な邸宅を妓楼・遊廓・遊里とみる見解が定説となっているが、この定説は間違っているのではないかと疑問を抱く。注文主は何者か、屏風はいつ、誰に贈られたのか——屏風に描かれた図像の細部を綿密かつ多面的に読み解くことで、そこに隠されたメッセージを浮かび上がらせ、本作品が将軍家光の時代にどのように生まれてきたのかを明らかにする。

※「遊楽図屏風」全編のカラー画像および詳細なトレース図を収録!

A5判並製・384頁・2025年6月刊行
978-4-585-32068-5・定価4180円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

図書館の日本史

増補改訂版

新藤透 [著]

図書館はどのように誕生したのか? 歴史上の人物たちはどのように本を楽しみ、収集し、利用したのか? 寄贈・貸出・閲覧はいつから行われていたのか? 古代から現代まで、日本の図書館の歴史をやさしく読み解く! 2019年に刊行し、好評を博した一冊を大幅に加筆。

※2019年刊行の『図書館の日本史』に大幅に加筆し、新規に37項を収録。古代から現代にいたる日本の図書館の歩みを通史的にまとめ、解説した一冊。

ライブラリーぶっくす・四六判並製・520頁・2025年6月刊行
978-4-585-30018-2・定価4180円(税込)

和様と唐様の建築史学史

野村俊一 [編著]

「和様」「大仏様」「禅宗様」——中世日本建築を理解するうえで自明とされてきた様式概念だ。しかしその枠組みは、数多くの建築がもつ固有の歴史や多層的な意味を、はたして十全に捉えきれているだろうか。そもそも「和様」とは何か。「禅宗様」という言葉が取りこぼすものは何か。本書は、建築史学の根幹をなすこの問いへ、多角的かつ学際的な視点から肉薄する。第一部では、曖昧さのなかにあった「和様」の系譜を丹念に辿り、その全体像を再編する。第二部では、固定観念と化した「禅宗様」を解きほぐし、その内部に潜む「唐様」の痕跡を探る。二つの討議を中心に、多彩な論考と視点が思考の固定化を打ち破り、新たな研究の地平を切り拓く。日本建築史の現在地を俯瞰し、未来を展望する最前線。

A5判並製・544頁・2025年7月刊行
978-4-585-35004-0・定価8800円(税込)

古代木簡の世界

地方木簡がひらく古代史

森公章 [著]

木簡の出土遺跡は列島の津々浦々に及び、既存の文献史料では説明が難しい地域の様相を探究する手がかりとなる。地方官衙遺跡出土木簡(地方木簡)を仔細に読み解き、8・9世紀を中心に、国郡制支配の基層となる郡・郡司の動向や「郡の世界」と称すべき在地社会の状況、その上位にある国府や国分寺、国家的な生産施設のあり方など、律令制下の地域の姿を探る。また「郡的世界」から国衙の支配へと展開する10・11世紀の様相も明らかにする。木簡の基礎知識や地方木簡を用いた古代史研究の方法論をわかりやすく解説し、具体的な木簡の釈読と文献史料から地方支配の様相の展開を立体的に描く、画期的入門書。

A5判並製・218頁・2025年7月刊行
978-4-585-32066-1・定価3080円(税込)

相国寺

寺宝が伝える歴史と信仰

相国寺承天閣美術館 [編]

京都五山第二位の禅刹、相国寺。足利義満開基によるこの禅寺は、歴代足利将軍ゆかりの寺院、また渡来僧を含む数々の禅僧が交流した五山文学の発信地として、中世日本において大きな存在感を持った。しかし、たびたびの伽藍焼失などの憂き目に遭い、衰退と再興を繰り返す。近世初期には後水尾院による手厚い庇護のもと、現在に伝わる姿を形成していった。禅僧たち、そして足利将軍家、天皇家により、守り、伝えられてきた寺宝は何を語るのか——斯界をリードする15人の執筆者により本山相国寺そしてその塔頭の営みを明らかにする。

※北海道立近代美術館にて開催の「金閣・銀閣 相国寺展 若冲・応挙・芦雪—禅文化の名宝と美」(7月19日より9月7日まで)とのタイアップ企画!

書物学28・B5判並製・104頁・2025年8月刊行
978-4-585-30728-0・定価2200円(税込)

勉誠社
新刊案内

日本史

近現代日本を生きる

テキスト遺産

モノ×営為×世界

Edoardo Gerlini・河野貴美子 [編]

近年、文化的アイデンティティを問う議論が世界的に展開している。その議論において頻りに活用されるのは「遺産」という概念である。書記資料、文章、文字など、いわゆる「テキスト」という文化的生産物は、近代および現代においてどのように変容し、「遺産」となっていったのか。その働きと諸相はどのように把握することができるのか。さまざまに姿を変える「モノ」としてのテキストのありかた、また、それにまつわる継承・選択・改編・再生等の多様で複雑な「営為」、そして、「テキスト」を取り巻く「世界」への広がりという三つの視点を織り交ぜることで、過去から現在まで営々と積み重ねられてきた「テキスト」と人間との関係性を問い直し、人文学を起点とした新たな世界認識の可能性を示す画期的成果。

アジア遊学305・A5判並製・240頁・2025年7月刊行
978-4-585-32551-2・定価3300円(税込)

醍醐寺の法流と史料

佐藤亜莉華 [著]

真言宗の中核寺院として、創建以来、長きにわたり展開を続けてきた醍醐寺。醍醐寺はいかにして組織と文物を守り伝えてきたのか——密教における秘法の相承により形成される「法流」に着目。それを縦軸に、法流の存続に関わる諸問題に対応すべく寺院社会内部、さらには世俗権力との間で行われた折衝の諸相、また、聖教をはじめとする寺院史料群の生成・活用・相承について検討することで、中世・近世を通じた醍醐寺の変容を明らかにする意欲作。

【日本女子大学叢書27】

A5判上製・376頁・2025年7月刊行
978-4-585-31023-5・定価8800円(税込)

古文書研究

第99号

日本古文書学会[編]

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。

●収録

論文＝平清盛印章考(百瀬顕永)▼「平頼綱政権」と禅空失脚事件(野村航平)▼宗源宣旨の成立と展開(桐田貴史)▼土佐中村領主山内良豊発給文書の基礎的研究——近世初期大名家文書の研究資源化と活用の事例として(安岡達仁)▼研究ノート＝十四世紀東寺の評定衆制と意見状(貝塚啓希)▼追悼文＝平泉隆房氏を悼む(岡野友彦)▼古文書めぐり＝旧長谷川治郎兵衛家の収蔵資料(扇野耕多)▼随筆＝大内義隆の遣明船派遣とその背景(丸島和洋)ほか

B5判並製・152頁・2025年7月刊行
978-4-585-32409-6・定価4180円(税込)

妖怪ブックガイド600

氷厘亭氷泉・式水 downstream [著]

妖怪が好きだけど、どんな本があるのかわからない！ 妖怪のこと、もっと知りたいけれど、どんな本がある？ 妖怪が出てくる小説や漫画を読みたい！ 妖怪を知るための、一般書、専門書、小説、漫画、絵本、図鑑など、600冊を紹介。江戸時代から現代までの本、マニアックな本、研究書、児童書、ゲーム、特撮、画集など幅広い分野の書籍を、書影とともに掲載。妖怪コレクションや、シリーズもの、事典などをまとめてくわしく取り上げた「ぴっくあっぷ」、「ミニコラム」、2300項目超の充実の索引(妖怪名・人名・作品名)、全ページに「マメ知識」も付す。

A5判並製・304頁・2025年7月刊行
978-4-585-30017-5・定価3080円(税込)

勉誠社 新刊案内 日本史

外から見た 江戸時代の書籍文化

写本・版本・在外書籍

ピーター・コーニツキー[著]

江戸時代、女性の読書はどのように位置づけられていたのか。近世初期に勃興した活字印刷は、なぜ、製版印刷に駆逐されたのか。日本各地にのこるおびただしい数の写本は日本文化史のなかにどのように位置づけられるのか。海外の図書館になぜ多量の日本書籍が所蔵されているのか、それはいつ持ってこられたのか。日本の外からの視点を取り入れることで、日本における書籍文化の歴史がより鮮明に見える。日本の書籍文化史を海外からの視点で読み解き、学界をリードしてきたケンブリッジ大学名誉教授ピーター・コーニツキーによる日本書籍文化史講義！

A5判並製・496頁・2025年7月刊行
978-4-585-32067-8・定価9900円(税込)

新装版 近世蔵書文化論

地域〈知〉の形成と社会

工藤航平[著]

近世日本における出版文化の隆盛、そして文書による行政・経済システムの発展は、都鄙・身分を問わず、それぞれの社会的環境のもとで〈知〉の形成・蓄積をうながした。村落においては、当地における先例、行政や生活に関わる文書、そして書籍からの抜き書きなどを実務的な目的に併せて集成した編纂物が広く作成され、地域固有の〈知〉の源泉としてさまざまな場に応じて活用された。地域で受け継がれるアーカイブズを「蔵書文化」という観点から読み解き、近世社会特有の〈知〉の構造を描き出す。

※本書は2017年刊行の『近世蔵書文化論』(978-4-585-22200-2)の新装版です。

A5判並製・480頁・2025年9月刊行
978-4-585-32075-3・定価8800円(税込)

中世地下文書論の 方法と実践

春田直紀 [編]

中世の地域社会における文書利用の実態を、中央の権門からではなく、荘園・公領の現地の視点から総体的に把握するために2014年に提起された研究概念「地下文書」。「地下文書」は日本中世史研究の諸領域の中でどのように位置づけることができるのか。荘園制研究、村落史研究、都市・商業史研究、在地領主研究など様々な分野にこの研究概念を適用することで見いだされる論点や課題を提示する。さらに、文書実践の観点から論じた実証研究の成果に加え、隣接分野から地下文書論を評価する論考も掲載。中世地下文書論の成果と課題を体系的に論じ、その方法論・研究実践の到達点と今後の展望を示す。

A5判上製・464頁・2025年10月刊行
978-4-585-32076-0・定価9900円(税込)

高山寺本 明恵上人夢記 訳注

奥田勲・平野多恵・前川健一
立木宏哉・小宮俊海・野呂靖 [編]

中世日本の思想や文化に大きな影響を与えた明恵上人。その明恵が自らの見た夢を詳細に書き記した「夢記」は、明恵その人の思想や心性を示すのみならず、日本人と夢や精神世界との関係を解き明かすための重要な基礎資料である。明恵が開いた梶尾・高山寺に伝わる夢記の全篇に翻刻・訓読・現代語訳・語釈・考察を付した決定版。既刊の『増補改訂版 明恵上人夢記訳注』と併せ、「明恵上人夢記」の全体像を把握する画期的成果。

A5判上製・554頁・2025年10月刊行
978-4-585-31022-8・定価8800円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

新装版 中世密教寺院と修法

西弥生 [著]

中世において密教の修法は、現世利益を求める公家・武家の要請によって盛んに勤修されてきた。本書は、真言密教を伝持する醍醐寺に伝わる聖教を主に活用し、修法勤修と相承の仕組みについて「修法論」「法流論」「史料論」という三つの柱に基づき考察したものである。第Ⅰ部では、修法を実現するための諸要件について検討し、第Ⅱ部では真言密教の中核的法流たる三宝院流の存続を支えた修法とその相承の実態に迫る。第Ⅲ部では、修法の勤修と相承の場で生み出された史料の性格や機能を考える。聖教の「中身」にふみ込み、社会史的な観点で真正面から修法をとらえた研究である。

※本書は2008年刊行の『中世密教寺院と修法』の新装版です。

A5判並製・348頁・2025年10月刊行
978-4-585-31024-2・定価8800円(税込)

新彰義隊戦史増補改訂版

附・「彰義隊名鑑」「彰義隊文書」

大藏八郎 [編著]

『彰義隊戦史』は5年前に『新彰義隊戦史』として生まれ変わったが、その後に判明した57名を「彰義隊名鑑」に追加し、「彰義隊文書」にも9点を追加した。2024年出版の続編『彰義隊士の手紙』を執筆する過程で新たに判明した彰義隊持えの大刀の情報も加え、増補改訂版としてここに刊行。「勝てば官軍」の歴史は、官軍が負けた側の歴史を消し、真実の歴史の50%に過ぎない。消された50%の好例が彰義隊の上野戦争であり、「アームストロング砲で半日で敗退した」と矮小化されたが、実際は戊辰戦争の分岐点であり天王山の戦いだった。彰義隊に江戸市民から寄せられた熱狂的エールも忘れ去られた。教科書の常識となって国民に定着した「明治維新神話」も本書によって問い直される。

※本書は2020年刊行の『新彰義隊戦史』の新装版です。

B5判並製・682頁・2025年11月刊行
978-4-585-32078-4・定価7700円(税込)

和漢韻文文学の諸相

村上哲見[著] / 浅見洋二・松尾肇子[編]

唐宋期を中心とする中国文学およびその影響下で生み出された日本漢文学について、多くの注目すべき研究成果を発表してきた村上哲見。これまで単行本未収録であった二十二編の論考を、「中国詞論」「中国文人論」「日本漢詩論」に分類して収載。幅広い知見と深い読解と考察により研究を領導してきた泰斗による珠玉の論文集。

A5判上製・384頁・2025年2月刊行
978-4-585-39049-7・定価13200円(税込)

道教文化と日本

陰陽道・神道・修験道

日本道教学会[編]

東王公・西王母・司命・司籍・泰山・雷神・太歳・竈神(庚申信仰)、墓葬壁画にみえる四神と仙人、神器としての鏡・劍・玉、民間に流伝した風習や伝説、術数、風水、医薬学……。古来、日本文化の中に見られる様々な道教的要素。道教は、いつどのように日本に伝来したのか。道教の東アジア的広がりは、日本にどのような影響をもたらしたのか。「道教的な要素」は、果たして本当に道教に由来していると言えるのか。由来や存在形態などに未だ不明な部分が多い、日本における「道教文化」。陰陽道、神道、修験道、そして仏教など、多角的な視点から文化要素の問題を再検討し、日本における受容のありかたや、日本文化への影響を解き明かす。

A5判並製・432頁・2025年3月刊行
978-4-585-31020-4・定価4180円(税込)

勉誠社
新刊案内
東洋文化
東洋史

増補改訂版 道教美術の可能性

齋藤龍一・鈴木健郎・土屋昌明[編]

東アジアにおいて道教はどのようなかたちで存在したのか。道教は文化要素としてどのように展開し、変容していったのか。東アジアでの道教の広がりを踏まえつつ、道教が変容した諸相を探求。壁画や尊像・道壇などの儀礼空間で使用されるモノ、道教の使うアイテムや護符、経典や書籍など、美術作品や実物資料からのアプローチにより、文献や儀礼研究のみでは描き出すことの出来ない、立体的な道教史を再構築する。

※2010年に刊行され好評を博し、長らく入手不能となっていた同書に、最新の知見を盛り込んだ論考2本を増補、座談会を刷新した決定版!

A5判並製・280頁・2025年4月刊行
978-4-585-37019-2・定価3300円(税込)

中国の女性演劇

越劇とジェンダー

中山文[著]

19世紀中頃に浙江省で生まれ、「京劇に次ぐ第二の劇種」と称されるようになった「越劇」。なぜ女性が男性役を演じる女性演劇が生まれたのか。そこでは何がテーマとされたのか。女優たちは男性俳優から何を学び、学ぶことをやめたのか。また、観客たちは何を求めたのか。越劇の形成・展開に重要な役割を果たしてきた環境や人々をジェンダーの視点から考察し、時代や社会のニーズに応じてスタイルを変え続ける越劇の姿を、一人の女性の成長史として読み直すユニークかつ意欲的な試み。

A5判上製・360頁・2025年3月刊行
978-4-585-37018-5・定価8250円(税込)

水門

第32号

水門の会 [編]

歴史学・文学・言語学・民俗学など諸学の粋を集め、ジャンルを越えた新たな学問世界への扉を開く。

小特集は、「大和高田の白拍子舞—白拍子・静御前と龍神の道、太陽の道」・「宮澤賢治の周縁」の2本立てとなる。

水門32・A5判並製・378頁・2025年3月刊行
978-4-585-32463-8・定価3850円(税込)

宋代士大夫官僚の 基層社会と構造

伊原弘 [著]

宋代の士大夫官僚は地方社会より出現し、都市に住んで郷村社会を支配した。科挙によって採用され、帝国の忠実な官僚となった彼らが基盤とした郷村はどのような構造をなしていたのか。そしてそこにおける彼らの地位はどのようなものだったのか——。祭りや行事の寄進者名や寄金高、石刻史料にのこる道路工事への出資者名、地名にのこる著名人の名前などを手がかりに、宋代の地域指導者の存在やその社会の構成を探る。

A5判上製・592頁・2025年3月刊行
978-4-585-32049-4・定価13200円(税込)

勉誠社
新刊案内
東洋文化
東洋史

杜甫研究年報

第八号

日本杜甫学会 [編]

その詩は、それ以前の詩の総括であるとともに、以後の中国詩の出発点でもある。日本においては、五山の僧の崇敬、芭蕉の傾倒があり、明治以後も、中江兆民・島崎藤村・正岡子規を始め、知識人・国民の間で、その親愛の念は一貫して揺るがないものだった。漢文教育においても、杜甫の詩は教材の中で重要な位置を占めてきた。世界における杜甫への関心を見つめつつ、変転する時の中で無窮の未来に向かって杜甫研究を発展させ続ける一冊。

杜甫研究年報8・A5判並製・96頁・2025年4月刊行
978-4-585-39448-8・定価2200円(税込)

中国の名作をどう読むか

真の主題を見極める

下定雅弘 [著]

中国の古典には、王羲之「蘭亭序」、杜甫「感時花濺淚、恨別鳥驚心」、沈既濟『枕中記』、李商隱「夕陽無限好、只是近黃昏」など名作・名句と言われながら、その主題や解釈に議論があるものが少なくない。それら未解決の名作を取り上げ、あくまで原文に即しつつ、一字一句の典拠や作品の背景を究明し、あまたの議論に終止符を打つ。好評を博した『中国古典をどう読むか——規範からの逸脱、規範への回帰』の姉妹版。

A5判並製・592頁・2025年5月刊行
978-4-585-39048-0・定価6600円(税込)

壮族の歴史と文化

項青・田畑博子[編]

中国には漢民族の他に、現在認められているだけでも55の少数民族がいる。その中で、漢族に次いで二番目に多いのが、1854万人もの人口を有する壮(チワン)族である。80万年以上前から遺跡によりその存在が確認され、独自の文字・言語・習俗を持つ壮族の特徴については、日本ではほとんど知られていない。本書はこれまで中国で発表された、壮族に関わる代表的な論文を翻訳。壮語から見る稲作発生地域の検証、壮族に伝わる神話、独自の体系を持つ壮語や壮文字など、様々な視点から壮族を紹介・検証する。詳細な訳者注も付し、理解を助けるための図版も多数掲載。日本の教科書やガイドブックには載っていない中国の少数民族の姿を、中国人研究者の目を通して知ることができる画期的な一冊。

A5判並製・360頁・2025年7月刊行
978-4-585-33007-3・定価6600円(税込)

朝鮮の国家形成と東アジア

武田幸男[著]

幅広い史料の実証的分析により、古代の政治・社会を浮き彫りにしてきた朝鮮史・東アジア史研究の泰斗、武田幸男。三韓から三国にいたる国家形成期の重要テーマを論じた珠玉の論考・講演録を収録。古代東アジア史を考えるうえで日本史研究者も必携・必読の書。

A5判上製・608頁・2025年7月刊行
978-4-585-32070-8・定価13200円(税込)

勉誠社
新刊案内
東洋文化
東洋史

和様と唐様の建築史学史

野村俊一[編著]

「和様」「大仏様」「禅宗様」——中世日本建築を理解するうえで自明とされてきた様式概念だ。しかしその枠組みは、数多の建築がもつ固有の歴史や多層的な意味を、はたして十全に捉えきれているだろうか。そもそも「和様」とは何か。「禅宗様」という言葉が取りこぼすものは何か。本書は、建築史学の根幹をなすこの問いへ、多角的かつ学際的な視点から肉薄する。第一部では、曖昧さのなかにあった「和様」の系譜を丹念に辿り、その全体像を再編する。第二部では、固定観念と化した「禅宗様」を解きほぐし、その内部に潜む「唐様」の痕跡を探る。二つの討議を中心に、多彩な論考と視点が思考の固定化を打ち破り、新たな研究の地平を切り拓く。日本建築史の現在地を俯瞰し、未来を展望する最前線。

A5判並製・544頁・2025年7月刊行
978-4-585-35004-0・定価8800円(税込)

鏡としての日本文学

交響する中日古典

張龍妹[編]

日本文学を紐解くと、そこには中国文学の影響が少なからず散見される。それらを比較することは、中国古典の変容のあり方を発見することにつながり、さらに日本文学・文化の特徴を改めて見出すことになる。お互いの国の文学を研究することで、それぞれが響きあい、自国の文学を学ぶことのみでは見いだせなかった新たな魅力、意義を知ることにつながる。日本文学を研究する中国人研究者たち、そして長年中国で日本文学研究・教育に携わった日本人研究者たちによる古典文学の交響。日本文学を「中国」という他者としての視座から再考し、「国文学」の本質を問い直す。

アジア遊学308・A5判並製・352頁・2025年10月刊行
978-4-585-32554-3・定価3520円(税込)

空間と環境の 古代東アジア世界史

GISと歴史学・考古学の協奏

中村慎一・渡部展也・小林正史・
菊澤律子・大川裕子・村松弘一 [編著]

人々は地表という空間の上で暮らしを営み、そこに広がる自然環境や人文環境との関係やつながりの中で社会や技術を変化させてきた。空間と環境に着目することで、どのような歴史が浮かび上がってくるだろうか。本書では、歴史学、考古学、言語学など異分野の研究者が、気候変動と中国古代文明の形成との関係、長江流域から黄河流域の農耕社会の変動、鉱物資源の流通、唐代交通路の復元など、東アジアの環境や社会の変化、人・モノの移動に焦点を当て、GIS（地理情報システム）を応用しながら空間を具体化して分析・考察を行った事例を取り上げる。中国大陸を中心として、南洋諸島から、日本列島、中央ユーラシアに至るまでの空間認識と環境の利用方法について提示するとともに、古代東アジア世界史を再構成する。

アジア遊学307・A5判並製・320頁・2025年9月刊行
978-4-585-32553-6・定価3850円(税込)

宋代中国都市の形態と構造 新装版

伊原弘 [著]

宋代は中国の経済、文化が大きく発展した時代である。その結果、都市の構造や人々の生活も変化した。遺された貴重な地図や絵図などの史料を丹念に読み込み、唐と宋のあいだに横たわる画期を描き出す。

※本書は2020年刊行の『宋代中国都市の形態と構造』の新装版です。

A5判並製・356頁・2025年10月刊行
978-4-585-32079-1・定価4950円(税込)

勉誠社
新刊案内
東洋文化
東洋史

杜甫詩論考

後藤秋正 [著]

「詩聖」と称される杜甫。その生涯で多数の詩を残しており、後世に仇兆鰲が編纂した『杜甫集』には一四五七首が収録されている。しかし『杜甫集』成立以降、収録される詩数は増加し、偽作の疑いが濃いものも多くある。本書では、杜甫の作かどうか疑念が持たれている詩について精査し、真作か、偽作か、それとも他詩人の集から誤って入り込んだものなのか、その実情を考察。また、杜甫の詩に用いられる詩語、杜甫の交友関係から生まれた詩などについて、資料を精査し、作品を丁寧に読み直すことで解明された最新の知見を提示する。

A5判上製・488頁・2025年10月刊行
978-4-585-39054-1・定価11000円(税込)

やさしい中国近現代史

泉谷陽子・井上久士・水羽信男 [著]

中国共産党はどのように成立したのか？ 日中戦争はなぜ起きたのか？ 台湾は中国の一部なのか？ 天安門事件とは何か？ 毛沢東時代の暮らしは？ 中国の人権・自由・民主事情は？ 中国近現代史を学べる映画には何がある？ 19世紀半ばから現在まで中国人はどのように歩んできたのか。近現代史の流れを豊富な図版とともに平易に解説。国家レベルの政治だけでなく、社会の変化や人びとの暮らしや、従来あまり触れられてこなかったジェンダーにも焦点を当て、新たな視点を提供する。事件や話題、文化にまつわるトピックや重要人物を取り上げたコラムのほか、ミニコラム「この人」や参考文献を収載した入門的概説書。

A5判並製・272頁・2025年11月刊行
978-4-585-32080-7・定価3080円(税込)

性なる仏教

大谷由香 [編]

誰しにも悟りの可能性が開かれることをときに強調し、多様な人格を許容しうるかのように見える仏教。しかし世俗社会からの支持や支援によって仏教教団が成り立つからには、教団もまた性的役割分担をはじめとする社会的影響を受けざるを得ない。妻帯が禁止されている僧侶たちは、「家」を継承するためにどのような方法をとったのか。仏教を信仰する集団における、男性の美醜の基準とはどのようなものだったのか。仏教の中で女性はどういう役割を負わされ、どのように理想化されていたのか。仏教学・歴史学・美術史学など多様なフィールドの研究者が、女性や性的少数者など、仏教史上のマイノリティの存在に着目し、仏教が想定してきた性のありように迫る。

アジア遊学300・A5判並製・208頁・2025年1月刊行
978-4-585-32546-8・定価3080円(税込)

道教文化と日本

陰陽道・神道・修験道

日本道教学会 [編]

東王公・西王母・司命・司籍、泰山、雷神、太歳、竈神(庚申信仰)、墓葬壁画にみえる四神と仙人、神器としての鏡、剣、玉、民間に流伝した風習や伝説、術数、風水、医薬学……。古来、日本文化の中に見られる様々な道教的要素。道教は、いつどのように日本に伝来したのか。道教の東アジア的広がりは、日本にどのような影響をもたらしたのか。「道教的な要素」は、果たして本当に道教に由来していると言えるのか。由来や存在形態などに未だ不明な部分が多い、日本における「道教文化」。陰陽道、神道、修験道、そして仏教など、多角的な視点から文化要素の問題を再検討し、日本における受容のありかたや、日本文化への影響を解き明かす。

A5判並製・432頁・2025年3月刊行
978-4-585-31020-4・定価4180円(税込)

勉誠社
刊行案内
仏教
関連

描かれた法華経

本法寺蔵「法華経曼荼羅図」の時空

原口志津子 [編]

富山本法寺に伝わる重要文化財「法華経曼荼羅図」は二十二幅一具という規模を有する。その内容は法華経の経文や注釈書に基づく場面ばかりではなく、説経や説話に基づく図像も含み、十四世紀の心性や文化を今に伝える貴重資料である。豊富な画像情報には、建築や仏像・仏画を制作する場面や法要、舞楽のほか、牛耕、田植え、稲刈り、製油、製薬、鍼灸、風呂・湯屋、鉦脈ダウジング、井戸掘り、商売、物見遊山、草履作りなどの風俗描写が含まれており、「一遍聖絵」に匹敵する鎌倉時代末期の絵画資料として、近年諸分野からの注目を集めている。本書では、美術史研究のみならず、国文学や歴史学の視点より本法寺本を多角的に考究。その所蔵流転を明らかにし、鎌倉時代末期の律僧の活動として、本法寺本を位置づけ、さらには本法寺本に描かれた説話内容を通じて学僧の世界と在俗者の交流実態を明らかにする。

アジア遊学301・A5判並製・240頁・2025年3月刊行
978-4-585-32547-5・定価3300円(税込)

増補改訂版 道教美術の可能性

齋藤龍一・鈴木健郎・土屋昌明 [編]

東アジアにおいて道教はどのようなかたちで存在したのか。道教は文化要素としてどのように展開し、変容していったのか。東アジアでの道教の広がりを踏まえつつ、道教が変容した諸相を探求。壁画や尊像・道壇などの儀礼空間で使用されるモノ、道教の使うアイテムや護符、経典や書籍など、美術作品や実物資料からのアプローチにより、文献や儀礼研究のみでは描き出すことの出来ない、立体的な道教史を再構築する。

※2010年に刊行され好評を博し、長らく入手不能となっていた同書に、最新の知見を盛り込んだ論考2本を増補、座談会を刷新した決定版!

A5判並製・280頁・2025年4月刊行
978-4-585-37019-2・定価3300円(税込)

瓦から探る中世寺院

中世瓦研究会 [編]

考古学における瓦研究の歴史は古く、日本への仏教伝来にともなって飛鳥時代に建立された寺院で使用された瓦の研究に始まり、奈良時代の諸国国分寺や官衙の造営に使われた瓦などについての豊富な研究が蓄積されている。いわゆる歴史考古学において、瓦研究は土器の研究とならんで主要な研究分野として発展してきた。源頼朝が鎌倉時代初期に政権を築いた鎌倉の地に建立した永福寺の瓦を中心に、その形式・文様などから、生産・流通までを検証。考古学、美術史、文献史学など関連諸学からアプローチを集結し、瓦から見える「モノ」と「ヒト」の関わりを解明する。

A5判並製・272頁・2025年5月刊行
978-4-585-32549-9・定価3300円(税込)

日本中世の宗教世界

阿部泰郎 [監修] 佐藤愛弓・牧野淳司 [編]

現代の我々の想像を遙かに超えて、中世の日本は、宗教的なものに満ちた世界であった。それは、単に神仏への信仰という観念的なことでなく、何らかく「聖なるもの」の存在や働きを、日常に身体感覚を通じて直接に受けとめたり、反対に人から何者かへ訴え、働きかけるダイナミックな「冥と顕」の相互の交信が、絶えず繰り返り広げられていた世界だったのである——。各地に伝存する多種多様な寺院資料を紐解き、また、文学・絵画・建造物・芸能といった諸メディアとの連環をとらえ、中世日本における豊饒な宗教的世界観を立体的かつ通史的に描き出す必読の書。学界を領導する18名の研究者による最先端の研究状況をまとめて一冊で知ることの出来る中世日本の社会・思想・文化を考えるための充実のレファレンスツール!

A5判並製・584頁・2025年5月刊行
978-4-585-31021-1・定価9350円(税込)

勉誠社
刊行案内
仏教
関連

社寺建築を 知るための用語集

日本の歴史的建築を考える

濱島正士 [著]
文化財建造物保存技術協会 [編集協力]

日本の社寺建築は1300年の歴史を持ち、各時代に建てられた様々な建造物が数多く残されている。それらは建てられた時代や所在する地域の特徴を示しており、日本の歴史・文化を知るための重要な資料となっている。しかし、これらの木造建築に関わる用語は、単にその数が極めて多いだけでなく、時代や建造物の種類によって名称・解釈が異なることもあり、研究者ですらとまどう場面も少なくない。伝統的な木造建築の歴史研究および文化財建造物の保存修理を長年リードしてきた著者が、日本建築の歴史を考えるうえで重要な用語を豊富な図版資料と共に解説。

B5判並製・204頁・2025年6月刊行
978-4-585-35003-3・定価4180円(税込)

和様と唐様の建築史学史

野村俊一 [編著]

「和様」「大仏様」「禅宗様」——中世日本建築を理解するうえで自明とされてきた様式概念だ。しかしその枠組みは、数多くの建築がもつ固有の歴史や多層的な意味を、はたして十全に捉えきれているだろうか。そもそも「和様」とは何か。「禅宗様」という言葉が取りこぼすものは何か。本書は、建築史学の根幹をなすこの問いへ、多角的かつ学際的な視点から肉薄する。第一部では、曖昧さのなかにあった「和様」の系譜を丹念に辿り、その全体像を再編する。第二部では、固定観念と化した「禅宗様」を解きほぐし、その内部に潜む「唐様」の痕跡を探る。二つの討議を中心に、多彩な論考と視点が思考の固定化を打ち破り、新たな研究の地平を切り拓く。日本建築史の現在地を俯瞰し、未来を展望する最前線。

A5判並製・544頁・2025年7月刊行
978-4-585-35004-0・定価8800円(税込)

醍醐寺の法流と史料

佐藤亜莉華 [著]

真言宗の中核寺院として、創建以来、長きにわたり展開を続けてきた醍醐寺。醍醐寺はいかにして組織と文物を守り伝えてきたのか——密教における秘法の相承により形成される「法流」に着目。それを縦軸に、法流の存続に関わる諸問題に対応すべく寺院社会内部、さらには世俗権力との間で行われた折衝の諸相、また、聖教をはじめとする寺院史料群の生成・活用・相承について検討することで、中世・近世を通じた醍醐寺の変容を明らかにする意欲作。

【日本女子大学叢書27】

A5判上製・376頁・2025年7月刊行
978-4-585-31023-5・定価8800円(税込)

相国寺

寺宝が伝える歴史と信仰

相国寺承天閣美術館 [編]

京都五山第二位の禅刹、相国寺。足利義満開基によるこの禅寺は、歴代足利将軍ゆかりの寺院、また渡来僧を含む数々の禅僧が交流した五山文学の発信地として、中世日本において大きな存在感を持った。しかし、たびたびの伽藍焼失などの憂き目に遭い、衰退と再興を繰り返し、近世初期には後水尾院による手厚い庇護のもと、現在に伝わる姿を形成していった。禅僧たち、そして足利将軍家、天皇家により、守り、伝えられてきた寺宝は何を語るのか——斯界をリードする15人の執筆者により本山相国寺そしてその塔頭の営みを明らかにする。

※北海道立近代美術館にて開催の「金閣・銀閣 相国寺展 若冲・応挙・芦雪—禅文化の名宝と美」(7月19日より9月7日まで)とのタイアップ企画!

書物学28・B5判並製・104頁・2025年8月刊行
978-4-585-30728-0・定価2200円(税込)

勉誠社
刊行案内
仏教
関連

高山寺本 明恵上人夢記 訳注

奥田勲・平野多恵・前川健一
立木宏哉・小宮俊海・野呂靖 [編]

中世日本の思想や文化に大きな影響を与えた明恵上人。その明恵が自らの見た夢を詳細に書き記した「夢記」は、明恵その人の思想や心性を示すのみならず、日本人と夢や精神世界との関係を解き明かすための重要な基礎資料である。明恵が開いた梅尾・高山寺に伝わる夢記の全篇に翻刻・訓読・現代語訳・語釈・考察を付した決定版。既刊の『増補改訂版 明恵上人夢記訳注』と併せ、「明恵上人夢記」の全体像を把握する画期的成果。

A5判上製・554頁・2025年10月刊行
978-4-585-31022-8・定価8800円(税込)

法華験記の形成と思想

岡田文弘 [著]

叡山僧・首楞嚴院沙門鎮源よって編まれた平安期を代表する説話集『大日本国法華経験記』(『法華験記』)。文学、歴史、仏教研究の各分野において注目すべき内容を多く含む同書は、平安期の仏教信仰を窺い知るための史料、『今昔物語集』をはじめとする様々な説話集の関連文献として重視・珍重されてきた。『法華験記』はいかに形成され、その説話からいかなる思想が透けて見えるのか。成立の時代背景や環境、恵心僧都源信についての記述、畜生をはじめとする異類に対する功德を説いた一連の説話群など多角的に検討し、形成の様相とその思想の特性を明らかにする。

A5判上製・448頁・2025年10月刊行
978-4-585-31026-6・定価11000円(税込)

帝鑑図と帝鑑図説

日本における勸戒画の受容

小助川元太・薬師寺君子・野田麻美・水野裕史 [編]

古来、中国そして東アジア各国においては為政者がいかにあるべきかを説くために、他者や過去の出来事を鑑として戒めとすべき手本を示した「勸戒画(鑑戒画)」が利用されてきた。なかでも中国帝王にまつわる故事を取り上げたものは「帝鑑図」と称され、屏風や障壁画など室礼や儀礼空間の荘厳として、また、挿絵となり物語と共に『帝鑑図説』として版本化され、東アジアの文化の基底として大きな影響を与えてきた。東アジアの文化の基底として大きな影響を与えてきた。本書では、日本における帝鑑図・帝鑑図説の諸作品を美術史・文学研究の第一線の視点より、多角的に考察。通説を再検討し、「帝鑑図」とは何か、という基本的な定義を問い直す画期的成果。豊富な図版資料また国内作品の網羅的リストも具備した、東アジア文化史研究における必携の一冊!

A4判並製・432頁・2024年11月刊行
978-4-585-37017-8・定価16500円(税込)

古筆見の仕事

真偽の先にあるもの

編集部 [編]

この筆跡は誰のものなのか。ホンモノなのかニセモノなのか。由緒正しきモノなのか。モノにまつわる世界で常に問われ続ける永遠のテーマである。この「鑑定」という文化を、江戸時代の始まりより明治、大正、昭和に至るまで支えてきた人々がいた——古筆見である。その痕跡は、「極付き」「折紙付き」という言葉や、博物館などでよく目にする「伝 ○○」という表現に残されており、今なお我々のモノの見方にも大きな影響を与え続けている。「古筆見」とその中心であった「古筆家(こひつけ)」はいかに成立・展開していったのか。鑑定書や鑑定印にはどのような種類があるのか。彼らの鑑定を現代の我々はどうに考えるべきなのか。古筆家伝来の内部資料、菩提寺に残された資料や文物、さらには長期にわたる研究・蒐集の成果により、これまで纏まった記述のなされることのなかった古筆見・古筆家の営為や文化史的意義を多角的に明らかにする。

書物学26・B5判並製・120頁・2025年2月刊行
978-4-585-30726-6・定価2200円(税込)

勉誠社
新刊案内
美術・芸術

〈絵語り〉の日本中世

井上泰 [著]

絵巻・物語絵などの絵画は、単に画題を絵で「伝達」するメディアではない。そこには制作にかかわる主体の画題への[解釈—表現]行為過程が介在している。その表象行為をめぐって、日本中世にはどのような特質が見られるのか。中世に制作された『信貴山縁起』、極楽寺蔵『六道絵』、『源氏物語絵詞』などを中心に、鑑賞者の解釈を誘発する、その表象の編成と仕組みを分析する。また、教育の場では絵画をどのように扱うことができるのか。実際の教育現場に携わった著者ならではの視点から、定番教材である『竹取物語』や『徒然草』を題材に、古典学習の拡充に向けた絵画の有効的な活用を提案する。

A5判上製・352頁・2025年3月刊行
978-4-585-37013-0・定価9900円(税込)

描かれた法華経

本法寺蔵「法華経曼荼羅図」の時空

原口志津子 [編]

富山本法寺に伝わる重要文化財「法華経曼荼羅図」は二十二幅一具という規模を有する。その内容は法華経の経文や注釈書に基づく場面ばかりではなく、説経や説話に基づく図像も含み、十四世紀の心性や文化を今に伝える貴重資料である。豊富な画像情報には、建築や仏像・仏画を制作する場面や法要、舞楽のほか、牛耕、田植え、稲刈り、製油、製薬、鍼灸、風呂・湯屋、鯨脈ダウジング、井戸掘り、商売、物見遊山、草履作りなどの風俗描写が含まれており、「一遍聖絵」に匹敵する鎌倉時代末期の絵画資料として、近年諸分野からの注目を集めている。本書では、美術史研究のみならず、国文学や歴史学の視点より本法寺本を多角的に考究。その所蔵流転を明らかにし、鎌倉時代末期の律僧の活動として、本法寺本を位置づけ、さらには本法寺本に描かれた説話内容を通じて学僧の世界と在俗者の交流実態を明らかにする。

アジア游学301・A5判並製・240頁・2025年3月刊行
978-4-585-32547-5・定価3300円(税込)

中国の女性演劇

越劇とジェンダー

中山文[著]

19世紀中頃に浙江省で生まれ、「京劇に次ぐ第二の劇種」と称されるようになった「越劇」。なぜ女性が男性役を演じる女性演劇が生まれたのか。そこでは何がテーマとされたのか。女優たちは男性俳優から何を学び、学ぶことをやめたのか。また、観客たちは何を求めたのか。越劇の形成・展開に重要な役割を果たしてきた環境や人々をジェンダーの視点から考察し、時代や社会のニーズに応じてスタイルを変え続ける越劇の姿を、一人の女性の成長史として読み直すユニークかつ意欲的な試み。

A5判上製・360頁・2025年3月刊行
978-4-585-37018-5・定価8250円(税込)

増補改訂版 道教美術の可能性

齋藤龍一・鈴木健郎・土屋昌明[編]

東アジアにおいて道教はどのようなかたちで存在したのか。道教は文化要素としてどのように展開し、変容していったのか。東アジアでの道教の広がりを踏まえつつ、道教が変容した諸相を探求。壁画や尊像・道壇などの儀礼空間で使用されるモノ、道教の使うアイテムや護符、経典や書籍など、美術作品や実物資料からのアプローチにより、文献や儀礼研究のみでは描き出すことの出来ない、立体的な道教史を再構築する。

※2010年に刊行され好評を博し、長らく入手不能となっていた同書に、最新の知見を盛り込んだ論考2本を増補、座談会を刷新した決定版!

A5判並製・280頁・2025年4月刊行
978-4-585-37019-2・定価3300円(税込)

勉誠社
新刊案内
美術・
芸術

徳川美術館蔵 「遊楽図屏風(相応寺屏風)」 は語る

将軍家光の政治と「邸内遊楽図」の誕生

黒田日出男[著]

宏壮・豪華な邸宅における遊楽・遊興が描かれ、遊びに興じている人物たちのさまざまな姿が表現される「邸内遊楽図」。なかでも徳川美術館蔵「遊楽図屏風(相応寺屏風)」(重要文化財)は最優品として知られる近世風俗画の逸品である。その左隻の豪壮な邸宅を妓楼・遊廊・遊里とみる見解が定説となっているが、この定説は間違っているのではないかと。注文主は何者か、屏風はいつ、誰に贈られたのか——屏風に描かれた図像の細部を綿密かつ多面的に読み解くことで、そこに隠されたメッセージを浮かび上がらせ、本作品が将軍家光の時代にどのように生まれてきたのかを明らかにする。

※「遊楽図屏風」全編のカラー画像および詳細なトレース図を収録!

A5判並製・384頁・2025年6月刊行
978-4-585-32068-5・定価4180円(税込)

極上の仮名

王朝貴族の教養と美意識

五島美術館[編]

日本独自の文字として漢字を簡略化して生み出された「仮名」。その書の表現は10世紀から11世紀にかけて洗練され、特に王朝貴族により作られた美しい写本やそこから切り出された古筆切は、いまなお我々の眼を楽しませてくれる。日本の書の歴史を体系的に研究するために飯島春敬(1906~96)により蒐集された書芸文化院「春敬記念書道文庫」そして五島美術館が収蔵する平安時代に書かれた仮名や料紙の美しさを追求した名品に加え、日本書跡の淵源である明・清時代の中国書跡や拓本の重要作品をフルカラーで紹介。日本の書や表装に関する歴史研究を領導する七名の研究者による論考・コラム、王朝貴族の追求した仮名や料紙の美しさを体系的に理解することの出来る図説も収録した決定版!

※本書は五島美術館特別展示「極上の仮名」(2025/6/24~8/3開催)の公式図録です

A4判並製・208頁・2025年6月刊行
978-4-585-37020-8・定価2750円(税込)・品切れ

新装版 日本建築の歴史的評価と その保存

山岸常人[著]

私たちがとりまく社会・環境には、様々な時代に建てられた多種多様な建造物が混在している。これらの建造物は、過去から現在まで積み重ねられた記憶、即ち歴史の蓄積を伝えており、それらが残され、使い続けられることにより、生活を豊かで味わいのあるものとしている。歴史的建造物をどのように調査するのか、調査した建造物の特質をどのように読み取るのか、その特質を踏まえてどのように保存を行ってゆべきなのか、その保存のための制度の課題は何か。長年にわたり調査・研究・保存に携わってきた知見より、歴史的建造物を保存し将来に伝えて行くための考え方と、その具体的な事例を提示する。

※本書は『日本建築の歴史的評価とその保存』(2020年2月刊行)の新装版です。

B5判並製・672頁・2024年8月刊行
978-4-585-32052-4・定価18700円(税込)

和様と唐様の建築史学史

野村俊一[編著]

「和様」「大仏様」「禅宗様」——中世日本建築を理解するうえで自明とされてきた様式概念だ。しかしその枠組みは、数多の建築がもつ固有の歴史や多層的な意味を、はたして十全に捉えきれているだろうか。そもそも「和様」とは何か。「禅宗様」という言葉が取りこぼすものは何か。本書は、建築史学の根幹をなすこの問いへ、多角的かつ学際的な視点から肉薄する。第一部では、曖昧さのなかにあった「和様」の系譜を丹念に辿り、その全体像を再編する。第二部では、固定観念と化した「禅宗様」を解きほぐし、その内部に潜む「唐様」の痕跡を探る。二つの討議を中心に、多彩な論考と視点が思考の固定化を打ち破り、新たな研究の地平を切り拓く。日本建築史の現在地を俯瞰し、未来を展望する最前線。

A5判並製・544頁・2025年7月刊行
978-4-585-35004-0・定価8800円(税込)

勉誠社
新刊案内
建築史

社寺建築を 知るための用語集

日本の歴史的建築を考える

濱島正士[著]

文化財建造物保存技術協会[編集協力]

日本の社寺建築は1300年の歴史を持ち、各時代に建てられた様々な建造物が数多く残されている。それらは建てられた時代や所在する地域の特徴を示しており、日本の歴史・文化を知るための重要な資料となっている。しかし、これらの木造建築に関わる用語は、単にその数が極めて多いだけでなく、時代や建造物の種類によって名称・解釈が異なることもあり、研究者ですらとまどう場面も少なくない。伝統的な木造建築の歴史研究および文化財建造物の保存修理を長年リードしてきた著者が、日本建築の歴史を考えるうえで重要な用語を豊富な図版資料と共に解説。

B5判並製・204頁・2025年6月刊行
978-4-585-35003-3・定価4180円(税込)

建築とオリジナル

創造・継承・解釈

赤澤真理・加藤悠希・米澤貴紀[編]

当初のもの、唯一のもの、独創的なもの、真正なもの…という「オリジナル」の語義。建築において、「オリジナル」とは何を意味するのか。新築の設計、建設も既存建物の改修も文化財の修理も、先行して存在する建築・理念を参照しつつ新たな姿を創作するという意味では、過去の文脈から完全に独立した独創としてのオリジナルは想定しえないことになる。それでは何を以て「オリジナル」とし、そこにどのような価値を見いだすのか。果たして「オリジナル」は絶対的なものか？日本建築を中心として、日本美術や、諸外国の建築・文化財などとの比較から、時代、立場、思想により変わりゆく「オリジナル」に類する価値の捉え方について再検討する。

アジア遊学306・A5判並製・424頁・2025年8月刊行
978-4-585-32552-9・定価4180円(税込)

妖怪ブックガイド600

氷厘亭氷泉・式水 downstream [著]

妖怪が好きだけど、どんな本があるのかわからない！ 妖怪のこと、もっと知りたいけれど、どんな本がある？ 妖怪が出てくる小説や漫画を読みたい！ 妖怪を知るための、一般書、専門書、小説、漫画、絵本、図鑑など、600冊を紹介。江戸時代から現代までの本、マニアックな本、研究書、児童書、ゲーム、特撮、画集など幅広い分野の書籍を、書影とともに掲載。妖怪コレクションや、シリーズもの、事典などをまとめてくわしく取り上げた「ぴっくあっぷ」、「ミニコラム」、2300項目超の充実の索引(妖怪名・人名・作品名)、全ページに「マメ知識」も付す。

A5判並製・304頁・2025年7月刊行
978-4-585-30017-5・定価3080円(税込)

壮族の歴史と文化

項青・田畑博子 [編]

中国には漢民族の他に、現在認められているだけでも55の少数民族がいる。その中で、漢族に次いで二番目に多いのが、1854万人もの人口を有する壮(チワン)族である。80万年以上前から遺跡によりその存在が確認され、独自の文字・言語・習俗を持つ壮族の特徴については、日本ではほとんど知られていない。本書はこれまで中国で発表された、壮族に関わる代表的な論文を翻訳。壮語から見る稲作発生地地域の検証、壮族に伝わる神話、独自の体系を持つ壮語や壮文字など、様々な視点から壮族を紹介・検証する。詳細な訳者注も付し、理解を助けるための図版も多数掲載。日本の教科書やガイドブックには載っていない中国の少数民族の姿を、中国人研究者の目を通して知ることができる画期的な一冊。

A5判並製・360頁・2025年7月刊行
978-4-585-33007-3・定価6600円(税込)

勉誠社
新刊案内
民俗学

書物から渋沢敬三を読む

神奈川大学日本常民文化研究所 編

すべては屋根裏から始まった。
渋沢栄一の孫である渋沢敬三が、広大な邸宅の片隅にあった物置小屋の天井のない二階で始めたアチック・ミュージアム。子爵家のエリートでありながら農民や漁民などの常民に目を向けた渋沢は日常の生活道具である民具とともに、漁業史をはじめとする古文書や書物を集めて研究する学問の場をつくった。研究員を雇い、全国の研究者と交流して成果や資料を出版する活動はやがて日本の歴史学や民俗学、アーカイブズ、博物館を動かしていく。収集・収蔵された膨大な資料と刊行物を手に取って調べることを通じて渋沢敬三が織りなした在野の知の営為を書物から読み解く。

書物学30・B5判並製・112頁・2025年9月刊行
978-4-585-30730-3・定価2200円(税込)

海と陸のはざま

アジア・太平洋の干潟文化を探る

秋道智彌・辻貴志 [編]

干潟とは、海と陸のはざまに発達した領域であり、生態学的移行帯(エコトーン)でもある。干潟の文化は先史時代から連綿と継承されてきた海辺の文化資産であり、そこに生息する生き物は、ヒトにさまざまな種類の食料をもたらしてきた。しかし、今日、干潟は埋め立てや護岸工事による破壊、干拓による農耕地化や住宅建設などの、人為による環境破壊により危機的な状態にある。干潟文化を東アジア、東南アジア、オセアニアの比較事例からひもとき、干潟文化を具体的かつ多面的な次元で考究。考古学、人類学、地域研究、民俗学、地理学、環境社会学などの多様な側面から、「干潟文化」に総合的にアプローチする。人類が平等かつ心豊かに生きるためのヒントを秘めている干潟。人類と生き物にとっての干潟の意義について地球規模の視座から理解を促す。

アジア遊学310・A5判並製・312頁・2025年10月刊行
978-4-585-32556-7・定価3850円(税込)

古筆見の仕事

真偽の先にあるもの

編集部[編]

この筆跡は誰のものなのか。ホンモノなのかニセモノなのか。由緒正しきモノなのか。モノにまつわる世界で常に問われ続ける永遠のテーマである。この「鑑定」という文化を、江戸時代の始まりより明治、大正、昭和に至るまで支えてきた人々がいた——古筆見である。その痕跡は、「極付き」「折紙付き」という言葉や、博物館などでよく目にする「伝 ○○」という表現に残されており、今なお我々のモノの見方にも大きな影響を与え続けている。「古筆見」とその中心であった「古筆家(こひつけ)」はいかに成立・展開していったのか。鑑定書や鑑定印にはどのような種類があるのか。彼らの鑑定を現代の我々はどのように考えるべきなのか。古筆家伝来の内部資料、菩提寺に残された資料や文物、さらには長期にわたる研究・蒐集の成果により、これまで纏まった記述のなされることのなかった古筆見・古筆家の営為や文化史的意義を多角的に明らかにする。

書物学26・B5判並製・120頁・2025年2月刊行
978-4-585-30726-6・定価2200円(税込)

貸本問屋と貸本文化

娯楽的書籍の出版・流通・受容

松永瑠成[著]

江戸時代以降、日本国内における書籍の出版点数は年々増加し、それまで読書と縁のなかった層へも、次第に書籍が行き渡るようになっていった。しかし、当時の書籍はそれほど安価でなく、蔵書として代々引き継がれていくだけの価値を有する学問的な書籍以外、たとえば娯楽的な読み物などを購入して読む人々はそう多くなかった。そのような娯楽的書籍の流通・受容を支えたのが貸本文化である。近世・近代に営業していた貸本屋の実態、また、貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す機能を有した貸本問屋の業態を、諸種の史料を用いて解明。「貸本問屋→貸本屋→読者」という娯楽的書籍の出版・流通・受容の全容を明らかにする意欲作。

A5判上製・672頁・2025年2月刊行
978-4-585-32063-0・定価11000円(税込)

勉誠社
新刊案内
書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学
総記

江戸庶民の読書と学び

増補改訂版

長友千代治[著]

教養熱は江戸時代にもあった！ 出版文化が開花した江戸時代、さまざまな知識が書物によって伝播していく中で、人びとのなかに「学び」への熱が高まっていった。彼ら・彼女らはどのような知識を求め、どのような体系のなかで知を自家薬籠中のものとしていったのか。そして、それを担う書物はどのように読者の手に伝えられたのか。当時のベストセラーである啓蒙書や教養書、そして、版元・貸本屋の記録など、人びとの読書と学びの痕跡を残す諸資料の博搜により、日本近世における教養形成・書物流通の実情を描き出す。

※2017年に刊行され好評を博した同書の増補改訂版。

A5判並製・352頁・2025年2月刊行
978-4-585-32065-4・定価5280円(税込)

デジタルデータの 長期保存・活用

その理論と実践

嘉村哲郎[責任編集]

わが国のデジタルアーカイブ(DA)は、横断的な検索プラットフォームとして定着しつつある。しかし、データ公開に関わる技術や方法論については活発な議論がなされている一方で、デジタルデータを保存するための情報システム基盤や運用管理といったインフラの観点からの検討は不十分な状況にある。本書では、理論研究の専門家による知見と、情報システム基盤や運用管理の実務的観点を組み合わせながら、デジタルデータ長期保存の理論と実践について論じ、将来のDA活用に向けた基盤づくりをめざす。

※「デジタルアーカイブ・ベーシック」第3期は全3巻。

デジタルアーカイブ・ベーシック・A5判並製・392頁
2025年3月刊行・978-4-585-30305-3・定価4620円(税込)

近代製本の100年

明治・大正・昭和

編集部[編]

折る、重ねる、綴じる、表紙を付ける……。製本には様々な工程があり、それぞれの作業を得意とする工場によるリレーの中で書物としてのかたちが作り上げられていく。日々進歩する製本機械のオペレーティング、昔と変わらない手作業でしかできない工程、そして各工程を担う工場をまとめ上げる人脈。製本という営為には確実に人が関わり、技術の刷新と継承が行われている。製本の現場、工程、技術、そこに携わる人々のあり様に迫り、書物文化の100年を製本という側面から考える。大正13年創立の「京都製本紙截同盟会」から始まって、今年100周年を迎える京都府製本工業組合の面々による座談会も収録。京都の製本を支えてきた現場の方たちの研鑽の歴史、製本の現在の生の声をお届けする。

書物学27・B5判並製・96頁・2025年4月刊行
978-4-585-30727-3・定価2200円(税込)

デジタルアーカイブ入門

つかう・つくる・支える

柳与志夫・渡邊英徳[責任編集]

AI、ビッグデータ解析、ブロックチェーン、クラウド技術、RAG……。デジタル技術の進化によって、「保存」「記録」の概念は大きな変化を遂げつつある。その中で「真正な記録」を残し、「共有」と「再創造」の場を提供することがデジタルアーカイブ(DA)のあらたな使命となる。日進月歩で変化していくDAにまつわる事象・事項を網羅的に解説。

A5判並製・440頁・2025年5月刊行
978-4-585-30015-1・定価4620円(税込)

勉誠社
新刊案内
書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学
総記

学校図書館概論

金沢みどり・雪嶋宏一[監修] 雪嶋宏一・須永和之[編著]

学校図書館は、学校教育において欠くことのできない基礎的な施設であり、児童生徒の日々の学習に役立ち、教職員が教育活動に利用できる資料・情報を備えている。学校図書館の歴史や関連法規からその理念と現在の課題を示すとともに、生涯学習社会の課題や海外の学校図書館、GIGAスクール構想の優れた実践例を紹介しながら、現代の学校教育において学校図書館が果たす役割を解説する。

ライブラリー 学校図書館学2・A5判並製・312頁・2025年5月刊行
978-4-585-30402-9・定価2750円(税込)

「メタデータ」の パースペクティブ

池内有為・木村麻衣子[責任編集]

人類の知を循環させ、増幅させ、未来に届けるために不可欠なメタデータ。図書館、博物館、アーカイブズをはじめとするさまざまな領域で築かれてきたメタデータの来し方と現在地を可視化し、さらなる対話や連携の起点となる論点を提示する。「デジタルアーカイブ・ベーシック」第3期完結!

デジタルアーカイブ・ベーシック・A5判並製・408頁
2025年6月刊行・978-4-585-30306-0・定価4950円(税込)

書物から渋沢敬三を読む

神奈川県立日本常民文化研究所 編

すべては屋根裏から始まった。
渋沢栄一の孫である渋沢敬三が、広大な邸宅の片隅にあった物置小屋の天井のない二階で始めたアチック・ミュージアム。子爵家のエリートでありながら農民や漁民などの常民に目を向けた渋沢は日常の生活道具である民具とともに、漁業史をはじめとする古文書や書物を集めて研究する学問の場をつくった。研究員を雇い、全国の研究者と交流して成果や資料を出版する活動はやがて日本の歴史学や民俗学、アーカイブズ、博物館を動かしていく。収集・収蔵された膨大な資料と刊行物を手に取って調べることを通じて渋沢敬三が織りなした在野の知の営為を書物から読み解く。

書物学30・B5判並製・112頁・2025年9月刊行
978-4-585-30730-3・定価2200円(税込)

大宅壮一文庫解体新書Ⅱ

雑誌図書館を活用した研究

阪本博志[編]

大宅壮一(1900-1970)が収集した膨大な雑誌のコレクションを基礎として設立された大宅壮一文庫の蔵書は、現在雑誌13,600種類・80万冊にもおよぶ。これらの蔵書とデータベース「Web OYA-bunko」を活用して構築された論考を示す、意欲的な一冊。2021年に刊行し好評を得た『大宅壮一文庫解体新書』の第2弾、ここに刊行!

A5判並製・200頁・2025年9月刊行
978-4-585-30021-2・定価3300円(税込)

勉誠社
新刊案内
書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学
総記

江戸時代の図説事典 訓蒙図彙

小林祥次郎[解題]

江戸時代初期、寛文6(1666)年刊の、わが国最初の図説事典の初版初刷り本を復刻。日本の博物学の歴史に輝く名著として高く、後続の絵入り事典の模範となった。総語彙数約8,000語を収録し、日本語・日本文学、風俗史、博物学史の有力資料であり、1,484点におよぶ精緻な図は、今日でも図版やデザイン画として様々に利用できる。2012年に刊行し、好評を得た『江戸のイラスト辞典 訓蒙図彙』が、装いも新たに刊行!

菊判並製・1168頁・2025年11月刊行
978-4-585-30019-9・定価11000円(税込)

100年後も手に取れる本に!

日比谷図書文化館「内田嘉吉文庫」の
保存・修復・活用

編集部[編]

明治・大正期に通信省で日本の海事行政に関する法律の整備などに尽力し、また台湾総督として植民地行政にも携った内田嘉吉(1866~1933)。彼の約16,000冊の蔵書を収める内田嘉吉文庫は、日比谷図書文化館に保管され、現在も和漢洋の古書・貴重書が一般に公開されている。内田はどのような書籍を遺したのか。文庫に保存されている書籍は、どのような造本・装幀をされているのか。これらの書籍を広く活用するために、どのように保存・修復がされてきたのか。内田嘉吉文庫の膨大な書物から、書物を愛した官僚・内田嘉吉の営為、またその資料の価値や魅力を探る。

書物学31・B5判並製・128頁・2025年11月刊行
978-4-585-30731-0・定価2200円(税込)



勉誠社
Benseisha

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-18-4 徳栄ビル4F
WEBSITE=<https://bensei.jp/> E-mail=info@bensei.jp
TEL=03-5215-9021 FAX=03-5215-9025